

館報 西将

第 63 号

発行
西 鼎 分 館
編 集
分館広報部
印 刷
杉 本 印 刷

■人口：男161人(+2) 女161人(-3) 計322人(-1) ■世帯数：137戸(+5)

※令和4年11月末現在
※カッコ内は前年比



松川堆積土砂撤去の為ため河岸の幅が狭くなり、どんど焼きのスペースも失われた。昨年引き続き規模を縮小しての開催となった。

西鼎春秋

年明け早々の話題は中国のゼロコロナ政策解除による感染爆発だった。彼の国の情報は鵜呑みに出来ないのが常だが当初、感染死者数は僅か十人にも満たないという呆れた数字で、WHOなどの批判を受けて再公表した数字も実態にそぐわないと同国内SNS上でも批判が出るものだった。

これを受け、日本が中国からの入国時検査を行うと、日本人にビザを発給しないという報復に出た。彼らには至極当然なこの動きに、ただ文句を言うだけの政治感覚では国際的に通用しない。

身近にも同様に認識のズレはあり、旅行支援や行動制限なし状態でコロナ終息かのような人流も散見される。感染症法上の位置づけも今春には「5類」になる見通しだが、今しばらくはコロナからの啓蟄の声を静かに待ちたい。

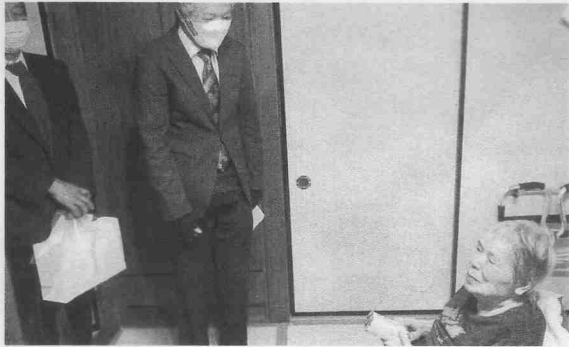
写真で見る西鼎公民館 活動の記録



防災訓練



新年度総会



敬老会



鯉のぼり祭り

一年間を振り返って

区 長 関 口 明

私が、区長を引き受けて早一年が過ぎようとしています。四月、区の総会で承認を受けて、一年がスタートしました。五月には、久しぶりに松川を泳ぐ鯉のぼりが気持ち良さそうに見えて、元気をいただきました。

六月には、夏祭りを予定していましたが、コロナ感染拡大により中止することになりました。何年かぶりの開催

をしたかったのですが、残念でなりませんでした。

八月には、矢高神社の秋季祭典が、行なわれて自宅では火を観賞し、気持ちが和みました。九月には防災訓練を行いました。購入したボートで仮の救助訓練を行いました。実際は水に浮かべての訓練は出来ませんでしたので、どこかのタイミングで実行したいと思っています。

また敬老の日を中心に、七十五歳以上の方に質素ではありましたが赤白饅頭を配布してお祝いしました。十月には、趣向を変えて運動会でペタンクを開催して、区民のふれあいを感しました。十一月には、文化祭、十二月には大掃除、一月どんど焼と、コロナ禍の中工夫をこらして、行事をしてきました。

区民の皆様、執行役員の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。

西鼎分館この一年

分館長 村澤 裕之

国内でコロナ感染が認められて三年が経過し四年目に突入しました。

分館長に任じられての一年目も過去二年同様感染リスク対応を踏まえての事業検討を進めて参りました。

本館事業は軒並み中止もしくは縮小開催となり、分館事業もコロナ禍前の通常開催が叶わず、地区の世代間交流の振興と言う使命が果た

せず残念でなりません。その中でも運動会に関しては参加者を募ってのペタンク大会での変更開催としたところ、大勢の区民の参加をいただき一応の事業継続が図れたのではと思います。

来年度はGW明けには制限緩和の見通しですので対策を講じ工夫を凝らしての事業開催を図り、区民の交流と共に事業手法等の継承に

も繋げて参りたいと思います。次年度も分館活動へのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。



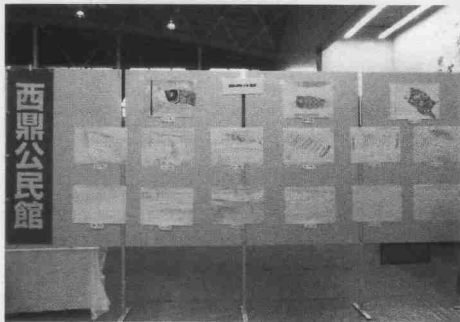
西鼎大運動会(ペタンク大会)

来年度に向けて

文化部長 桐生 貴透

本年度文化部長を一年間務めてまいりました。新型コロナの影響によりワンデーマーチ、鯉のぼり祭り、いいだ人形劇フェスタ、西鼎夏祭り、すべて中止になりました。唯一行う事が出来たふるさと鼎ふれあい文化祭は、二千人を越える来場者を迎え大盛況で終える事が出来ました。

来年度も新型コロナの影響を受けるかも知れませんが、地域が盛り上がるよう一年間取り組んでいきたいと思えます。皆様のご協力をお願いいたします。



西鼎公民館
ふるさと鼎ふれあい文化祭



ボッチャ大会

一年間を振り返って

体育部長 福澤 啓

この一年間もコロナ禍制限により鼎地区体育祭や縦断駅伝が開催できませんでした。本来はこれら行事を通して各地区が交流するだけに残念でした。そんな中に西鼎では内容を工夫して大運動会が開催できたことに感謝申し上げます。また、鼎公民館ではコロナ禍でも実施できるスポーツ「ボッチャ」を普及しています。今後も皆さんが安全に安心して交流できることを主眼に行事を開催したいと思えますので、引き続きご協力をお願いいたします。

一年の活動を振り返って

P T A 支部長 斉藤 鉄平

今年度も昨年度に引き続き、コロナ禍での P T A 活動となりました。予定していた行事が中止となった、従来通りの活動がしづらい状況であったりしましたが、その中でも農業体験、資源回収、どんど焼きを、地域の皆様のご協力のおかげで無事行うことができました。来年度はどのような状況になるか分かりませんが、子どもたちに少しでも楽しい思い出を残せる P T A 活動ができるよう願っています。一年間ありがとうございました。



どんど焼き

皆さんの支えに感謝

壮年団支部長 斎藤 崇

令和四年度は正団員が四名となりました。いよいよ人員不足が深刻になってきています。そんな中でも、二月三日の節分行事は、多くの世帯からのご依頼をいただき、また、先輩方にもご協力いただくことで、三年ぶりに開催することができました。暖かい声も多くいただき、区の皆さんや先輩方に

一年を振り返って

環境衛生委員長 前澤 秀夫

ベテランである前任者から引き継ぎ一年が過ぎようとしていきます。西鼎に越してきてからまだ日の浅い私ですので、地区のことに不案内で分からないことが多く、委員や周囲の方々には大変お世話になりました。

おかげさまで、春秋のごみゼロ運動、全市一斉水辺等美化活動など、何とか大過

支えていただいていること実感することができた行事でした。これからも応援してください。皆さんの気持ちにこたえられるよう、団員力を合わせて頑張ります。



節分行事

なく終わることができました。まもなく二年目の任期を迎えますが、ごみのポイ捨てなどは依然として多い状況ですので、区民の皆様には引き続きのご協力をお願いいたします。



リサイクルステーション

写真で語る

西鼎今昔



松川の恵み、水車のごとなど

齋藤 憲

波も緑の影うつる

清きふちせの松川の：

鼎小学校へ通った人ならば忘れていない。校歌の冒頭。松川は、鼎にとって切っても切れない縁だ。切石から東鼎まで貫いて松川へ流れ、天竜川へと注ぐ。西鼎は、左右両岸から清流を抱き抱える。いつでもどこからでも、何かにつけて目をやった。

清流は、多くの人々に恩恵を与えて来た。きれいな水をたくさん必要とする生業がある。水車を使ってコメを搗いた精米業。江戸時代、山村のコメは人馬で愛宕坂、羽場坂を運ばれた。花崗岩地帯のおかげできれいな水と、消費地の城下町飯田が精米業を支えた。昭和二十年代までは悠々と回る水車をあちこちで見かけた。農家の副業として結構なものだった。

学校の行き帰り、生徒の好奇心を引くには十分であった。大人の背丈よりも大きな車が音を立て、水を吹き散らせて回る。石ころを投げる。カランコロン鳴りながら飛び跳ねる。いたずらをしたものだ。茶屋町から矢高へ行く横道と



水神さま
加藤さん宅(昭和26年)

役場へ上る縦道の交わる辻にあった水車。車川水系。道草を食うには格好の場所だった。コメを搗いているという大事なことは知る由もなかった。

西鼎には、元町長の加藤文三郎さんのお宅にあった。ゆったりと回っていた。水神さまの碑が今も立つ。家業は醸造業。新飯田橋の南側にもあった。電力による機械が精米、製粉にも導入され、水車は見放されてきた。いずれも思い川。地域の先輩にお聞きすると二丁目に、他に二カ所あった。

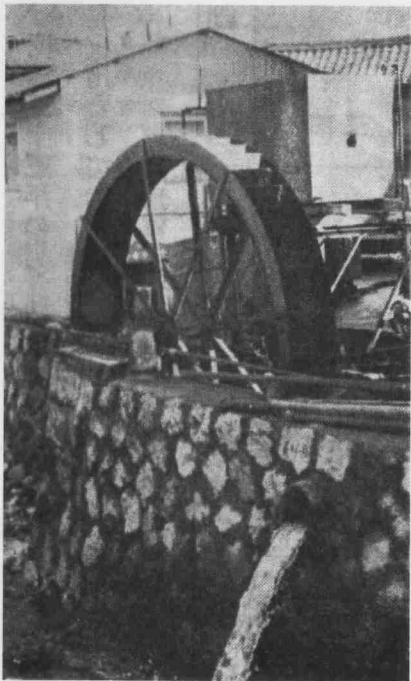
鼎で最後の水車は東鼎にあった。もと山口製糸という会社で、その後、自動車屋さん。今はコンビニがある。石垣から一ああ、な



思い川の取り入れ口(下茶屋公民館裏)

るほど：車川だ、と分かる。もととは嶋田村(松尾村)へ流れるので、嶋田井。いつしか水車が増えて鼎では車川と呼ぶようになった。小学校、裸足で校庭に出た体育。校舎に戻る時、押し合いへし合い足を洗った。あれも車川。

戦前から戦後にかけて、土地の基盤整備に貢献した鷺見京一さんによれば、車川水系に三十六カ所あった(鼎の新聞「昭和四十年四月」)。鷺見さんは、一群の水車所有者たちを、明治から大正にかけて



鼎で最後に残った水車
東鼎、昭和40年頃(鼎町誌より)

地域の産業基盤をつくったとたたえた。

製糸業の底辺も松川に支えられていた。天竜社、大竜社が鼎に来たのも豊富な水のおかげでもあろう。前身の南竜社、伊那社、いずれも西鼎であった。

清流の恵み、他にも。半生菓子屋さん、西鼎に二十年代四軒あった。二丁目、老舗の漬物屋さんも松川の水を利用しただろう。四丁目、染物屋さんが二軒。(上茶屋には石材店が今でも軒を並べる。)

二つの橋の間、松川左岸の大きな池をかすかに覚えている。祖母も節句にはいけすから一匹ずつってきた。鯉の旨煮が並んだ。多くの農家の庭先に池があった。

夏の水浴びー深みでは足元に魚の影。強い日差しに熱くなった砂や石。雲母が光っていた。飯田台地の南側崖下はあちこちに湧き水。冬が来る頃、母たちはお菜洗いに集まった。冷たかっただろう。

自然や季節とともにあった生活。その中心にいつも、松川が流れていた。

第32回西鼎鯉のぼり祭り

令和5年5月5日開催予定